

2月18日(水)

2009年(平成21年)

発行所：東京都千代田区一ツ橋1-1-1

〒100-8051 電話(03)3212-0321

毎日新聞東京本社



真紀さんが肌身離さず身に掛けているペンダント。表にヘビが巻き付いたつえのマーク、裏には意識障害時の処置が書かれている

いっぶう変わった銀色のペンダントを、東京都大田区の主婦、真紀さん(36)は24時間身に付けている。入浴時でも就寝時を外すことはない。「いざという時に、私の命を守ってくれるのです」

緊急時の持病の処置記すペンダント 「医療識別票」知って

の副作用で糖尿病を併発。朝と夕の2回、自らインスリンを打つ。ある夜、布団に入った直後、けいれん発作に襲われた。インスリンで血糖値が下がってきたのが原因で、隣に

寝ていた夫が気付いてアドウ糖を投与し、意識を取り戻した。投与がなければ死に至る場合もあり、主治医から「外出先で倒れ、見知らぬ病院に運ばれたら手遅れになりかねない」と言われた。

ペンダントは容体急変時、本人の代わりに医療関係者に適切な処置を伝える役目を果たす。「昨年11月に購入し、安心して外出できるようにになった」と真紀さんは喜ぶ。

など総称され、広く普及している。米国の救急隊員は、倒れた人が医療識別票を身に付けていないか確認する訓練を受けている。

そのころ、親しかった日本の知人から「何かのほすみで倒れ、薬を飲むことができなくなれば……そう思うと不安だ」と打ち明けた。この知人はがんで甲狀腺を全摘出していた。カルシウムを補給しなければ重篤な状態となり、命にかかわ

欧米で普及 ■意識不明時に備え24時間装着

こうしたペンダント類は、北米やヨーロッパで「メディカルID(医療識別票)」「メディカルアラート・ジュエリー(緊急医療情報アクセサリ)」

シャス・アイ(世田谷区)が「メディック・インフォ」という商品名で06年4月から販売しているもの。他に「医療識別票を作ろう」と思い立った。5年前に起業し、これまでに500個販売した。

先日も、海外への渡航のため、必要な薬剤を一生飲み続ける必要があった。この時に「日本語の医療識別票を作ろう」と思い立った。5年前に起業し、これまでに500個販売した。

「海外にいる場合、もしもの際にとっさに英語で言えるかしら? そんな不安もあり、英語と日本語両方を購入させていただきますし、幸い渡航中には何も起きませんでした。が、着けていると安心で、気持的に軽く過ごせました」



救急のシンボル「スター・オブ・ライフ」

スター・オブ・ライフは米運輸省高速道路交通安全局(NHTSA)が77年、救急救命の能力や性能を証明するマーク(証明商標)として登録し、救急救命士の腕章や救急車両、ドクターヘリなどに付けられている。証明商標は米国の制度で、日本のJIS(日本工業規格)マークなどに類似する。

その後、世界保健機関(WHO)の切手にも登場し、カナダやヨーロッパ各国で救急医療のシンボルマークとして採用されている。

欧米では、ペンダントやブレスレットのほか、時計(文字盤に図案を入れ、裏面に情報を刻む)や、運動靴に付けるタイプなどがある。難病患者の専門的な処方だけでなく、もっと軽度な病気の病名やアレルギーの原因物質のみを記載するケースも多いという。

【井上英介】

*

同社(03・3467・0484)の商品はインターネットで見ることが出来る。ホームページのアドレスはhttp://www.medic-info.jp/